

令和6年度事業報告（音楽）

自 令和6年4月1日

至 令和7年3月31日

公益目的事業3（顕彰事業）

1. 「第55回サントリー音楽賞」「第23回佐治敬三賞」（2023年度）の贈賞

令和6年2月29日（木）（音楽賞）・3月9日（土）（佐治敬三賞）選考会でそれぞれ選定のうえ、「第55回サントリー音楽賞」に近藤譲（作曲）を、「第23回佐治敬三賞」には《サウンドパフォーマンス・プラットフォーム特別公演 安野太郎ゾンビ音楽『大霊廟IV-音楽崩壊-』》を3月25日（月）理事会にて決定後、5月13日（月）16時よりサントリーホール・ブルーローズにて贈賞式を開催し、賞金700万円（サントリー音楽賞）、賞金200万円（佐治敬三賞）を贈呈。贈賞式に引き続き、同じくサントリーホール・ブルーローズで祝賀会を実施。

2. 「第56回サントリー音楽賞」の選定

ア. 選考過程

- （1）令和7年1月11日（土）に、選考委員7名による第56回「サントリー音楽賞」の第1次「候補者選考会」を国際文化会館に於いて開催した。
- （2）その結果、2024年にわが国の洋楽の発展に優れた業績をあげた人々として、候補者を選定した。
- （3）引き続き令和7年2月27日（木）に「受賞者選考会」を国際文化会館に於いて開催した。選考委員7名による慎重な審議の結果、「第56回サントリー音楽賞」に、山田 和樹氏が選定された。
- （4）3月17日（月）の理事会において、正式に「第56回サントリー音楽賞」は、山田 和樹氏に決定した。

イ. 贈賞理由

山田和樹がブザンソン国際指揮者コンクールで優勝したのは2009年。小澤征爾が同コンクールで優勝してからちょうど50年後だった。そして2024年2月9日。山田はサントリーホールで読売日本交響楽団の定期演奏会を振った。曲目はバルトーク《弦楽器、打楽器とチェレスタのための音楽》、武満徹《ノヴェンバー・ステップス》、ベートーヴェンの交響曲第2番。明らかに小澤の得意レパートリーに基づく選曲で、1曲目をヒンデミットの交響曲《画家マチス》に取り換えれば、小澤が1967年11月にニューヨーク・フィルハーモニックの定期演奏会で《ノヴェンバー・ステップス》を世界初演したときのプログラムになる。まずバルトークがヴィヴィッドかつ精緻。休憩を挟んで武満に。舞台に現れた山田は急に客席に語りかけた。小澤征爾が2月6日に亡くなったと。その情報解禁は9日19時。コンサートの開演時間だった。それ

からの武満での湿気漂うしなやかさ、ベートーヴェンでの大胆な畳みかけ。見事だった。事実は小説よりも奇なり。小澤に挑むかのように用意されたコンサートがそのまま追悼演奏会に。もちろんこれは偶然だ。ここで問題とすべきは 2024 年までの四半世紀にわたる山田の道程である。若き頃から覇気に富んだ躍動感で聴き手を魅了させてきたものの、天稟の気質に任せて閃きに頼るところもなくはなかった。が、年輪を重ねるとともに構想力とスケール感が膨らんできた。しかもその構想力は多分に奇想を孕む。常套を打ち破る楽曲解釈。意表を突く音色作り。この手があったかという楽器の配置。創意工夫がよく嵌る。その上にいざという時のドライヴ感の凄まじさといったら！瞬発力に耳が驚く。そんな山田の魅力は、5 月のモンテカルロ・フィルハーモニー管弦楽団の来日公演での、ベルリオーズ《幻想交響曲》とサン＝サーンスの交響曲第 3 番《オルガン付き》でも炸裂した。さらに言えば、東京混声合唱団の音楽監督としての仕事もまた重要だ。合唱指揮者としてもオーケストラ指揮者としても、決して手を抜くことなく、レパートリーに工夫を凝らして、ひとりでも多くの聴衆を獲得しようとする貪欲さは、クラシック音楽が生き抜いていくための大きな指針ともなるだろう。今後への大きな期待を込めつつ、サントリー音楽賞を贈る。

- ウ. 選考委員 伊東信宏、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、船木篤也、松平あかね
エ. 賞金 700 万円
オ. 贈賞 令和 7 年 6 月 25 日（水） サントリーホール ブルーローズ（予定）

3. 「第 24 回佐治敬三賞」の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和 5 年 9 月 1 日～10 月 31 日および令和 6 年 3 月 1 日～4 月 30 日の 2 回の募集期間に、令和 6 年 1 月 1 日～12 月 31 日（上期、下期）に実施される音楽公演についての応募を受け付けたところ、78 企画についての応募があった。応募公演について選考委員 9 名が分担し公演の視察を行った。
- (2) 令和 7 年 1 月 26 日（日）、「第 24 回佐治敬三賞」選考会を芸術財団会議室にて開催し、選考委員 9 名（内 1 名は事前に推薦票を委任の上選考会は欠席）による慎重かつ白熱した審議の結果、「第 24 回佐治敬三賞」受賞公演に、《山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-》と《田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界》が選定された。
- (3) 3 月 17 日（月）の理事会において、上記公演を正式に「第 24 回佐治敬三賞」の受賞公演に、《山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-》と《田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界》の 2 企画が決定した。

イ. 受賞公演概要

(1) 《山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-》

日時：(プログラム A) 2024 年 1 月 26 日 (金) 19:00 開演／1 月 27 日 (土) 15:00 開演

(プログラム B) 2024 年 1 月 27 日 (土) 19:00 開演／1 月 28 日 (日) 15:00 開演

会場：アトリエ第 Q 藝術 (東京・世田谷区)

出演：山本昌史 (コントラバス)

曲目：

(プログラム A)

ジョン・ケージ／《The Wonderful Widow of Eighteen Springs》

一柳慧／《空間の生成》

森田泰之進／《速驚曲第 3 番》※山本昌史委嘱作品／初演

木下正道／《石をつむ IX》※山本昌史委嘱作品／初演

ジェイコブ・ドラックマン／《Valentine》

フィリップ・ボアヴァン／《ZAB ou la Passion selon Saint-Nectaire》※日本初演

(プログラム B)

高木日向子／《Lost in ____ VI》※山本昌史委嘱作品

藤倉大／《Bis》

森田泰之進／《速驚曲第 3 番》

木下正道／《石をつむ IX》

ヤン・ロバン／《Myst》※日本初演

フィリップ・ボアヴァン／《ZAB ou la Passion selon Saint-Nectaire》

主催：山本昌史

(2) 《田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界》

日時：2024 年 12 月 7 日 (土) 18:00 開演

会場：晴れたら空に豆まいて (東京・渋谷区)

出演：田中悠美子 (義太夫三味線) 内橋和久 (ギター／ダクソフォン)

New Little One (スガダイロー Pf. 細井徳太郎 Gt. 秋元修 Dr.) 安達楓 (DJ)

曲目：

高橋悠治／《われを頼めて来ぬ男》梁塵秘抄による

藤倉大／《Jiai (慈愛／地合)》義太夫三味線のための※田中悠美子委嘱作品／初演

一ノ瀬響／《心の澄むものは》梁塵秘抄より

即興演奏 with 内橋和久

Plays セロニアス・モンク with New Little One

田中悠美子／《I was here》※初演

(開演前・転換・終演時) Listening Style DJ by 安達楓『録られた音響世界を聴く』

企画・主催：田中悠美子

ウ. 贈賞理由

《山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-》

山本昌史はコントラバス奏者という立場を超え、現代の作曲界をグローバルな視野で捉えながら、他の演奏家たちの視野になかなか入らない作曲家の作品を採り上げて、それらをみごとなパフォーマンスで披露する。このひとがいるおかげで、ことに日本の現代音楽界は格段に広い地平と展望を得ている。2023年に神奈川県立音楽堂で催された「紅葉坂プロジェクト vol.2」では、ピエール・ジョドロフスキのライブエレクトロニック作品に広い空間を用いて八面六臂の活劇的演奏を繰り広げた山本だったが、2024年1月のThe Unplugged Theatre（アンプラグド・シアター）は、それとは対照的なアトリエ第Q 藝術というインティメットな空間で催された。3日間にわたり2つのプログラムで行われたこの演奏会は、凝縮された音と荒行的な演奏行為の数々によって、会場の空気の密度を破裂させんばかりに高め、聴衆を強度の興奮状態へと導いた。現代作品によるこのエクスタシーは近年では珍しいものだ。ジョン・ケージ、一柳慧、森田泰之進、木下正道、ジェイコブ・ドランクマン、フィリップ・ボアヴァンというAプログラムの並びを眺めただけでも、山本がこれまでのコントラバス奏者、あるいは現代作品奏者たちとは異なった角度、それも「今」の仰角から音楽界を見つめていることが了解されよう。Bプログラムではケージ、一柳、ドランクマンの代わりに高木日向子、藤倉大、ヤン・ロバンの作品が入る。がたいの大きなコントラバスは、いろいろな「付き合い方」が可能な楽器だが、山本は通常奏法に秀でることは言うに及ばず、特殊奏法やばちを使った奏法、楽器を傾けたり裏返したりと言った挙動、打楽器的な扱い、声を伴いながらの演奏・・・あらゆる演奏行為を、あたかもそれがこの楽器本来の奏法であるかのように連続的にこなしながら、それぞれの奏法に緊張感を常駐させる。特殊奏法から見れば、通常奏法こそが「特殊」なのだ。その相対性のなかで、でもけっして演奏が平準化しないのは、ひとえに山本のパフォーマンスに漲る強度ゆえである。両プログラムの最後を飾る、長大なボアヴァン作品では、床一面に広げられた五線譜に従いながら、コントラバスという楽器との等身大の格闘技が繰り広げられる。まさに「プラグの外されたシアター」だ。ときに山本は楽器の影に隠れ、見えなくなり、また楽器との添い寝もする。演奏者と楽器と、どちらがこの芝居の主役なのか？いやこれはむしろ「ふたり」の対等なデュオ。山本がコントラバスから音を引き出すと同時に、コントラバスが山本という人格を引き出している。そのチャレンジングな楽器との相克は、まさに佐治敬三賞の精神に相応しい。

《田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界》

太棹三味線奏者田中悠美子の 40 年を超える活動の集大成にあたる公演である。彼女は高田和子を通じて高橋悠治《すががきくずし》《音楽のおしえ》の初演に参加し、高橋が高田らと始めた邦楽器グループ「糸」に加わった。本公演では《われを頼めて来ぬ男》の伝統譜を的確に音にしている。「糸」の委嘱を通じて知り合った一ノ瀬響とは交流が続き、シアターピース《KIYOH》(2010)を共作した。《心の澄むものは》は同日に初演されたネオポップ調の小品であり、三味線の伝統奏法では用いないハーモニクスが良いアクセントになっている。彼女は 1990 年代半ばから即興音楽に積極的に取り組み、大友良英のバンド Ground-Zero に加入して国際的に認知された。内橋和久とは同バンドの同僚として出会い、内橋が主宰した即興音楽祭 Festival Beyond Innocence の常連だった。内橋との即興が本公演の白眉であり、お互いの音楽性へのリスペクトにあふれた高密度かつ親密な 25 分の対話が受賞の原動力になった。活動の回顧にとどまらない新しい試みとして、彼女は本公演に向けて三味線曲の創作を続けている作曲家をリサーチし、藤倉大に《Jiai (慈愛／地合)》を委嘱した。田中がオンライン意見交換で伝統曲の暗さを強調した結果、藤倉には珍しい“真っ暗な”曲になった。また、不定形の即興音楽とは対照的な「形のある即興」としてジャズにも取り組んだ。三味線以前に親しんでいたピアノ／邦楽器奏者と日常的に共演／ジャズの形式にこだわらないフリーな音楽性、と条件を挙げてゆくと共演者はスガダイローに絞られ、彼が率いるトリオとセロニアス・モンクの曲をカバーすることになった。初顔合わせなので課題も残ったが、内橋との即興では封印していた義太夫の古典を自在に引用するプレイを持ち込み、別角度の評価が上積みされた。なお最後の自作曲《I was here》では伝統奏法に囚われずに楽器固有の音響を引き出し、この音響への愛ゆえに大学からこの楽器に転じた来歴も含めた語り芸として公演を締め括った。

今回の選考では応募公演が短い期間に集中したため視察者も推薦票も割れ、議論の過程で推薦を取り下げた委員が映像資料を参照して未視察の公演に支持を集約してゆく、異例の展開になった。その中で、多様な方向性を高水準で並べた田中の支持が増えてゆき、受賞に至った。彼女のキャラクターに由来する和やかな雰囲気も、長時間の選考過程ではプラスに働いたかもしれない。同様に支持を集めた山本昌史のソロ公演とどちらを選ぶかが最後に議論になったが、現代音楽／現代邦楽を含む伝統的な活動から出発し、しだいに即興音楽に活動の幅を広げていった田中と、ジャズロックのエレキベース奏者として出発し、メインバンドの NATSUMEN では海外公演やフジロックフェスティバルにも出演していた山本が、活動の幅を広げるためにウッドベースに取り組むうちに、現代コントラバス作品に重心を置くようになった歩みは相補的であり、むしろ両公演に積極的に同時贈賞することが、本賞の評価軸の幅広さを示すことにもなるという提案に全委員が賛同した。

- エ. 選考委員 浅井佑太、伊藤制子、岡田暁生、小室敬幸、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、野々村禎彦、水野みか子
- オ. 賞金 200 万円 今回は同時受賞につき各 100 万円が贈られる。
- カ. 贈賞 令和 7 年 6 月 25 日 (水) サントリーホール ブルーローズ (予定)

4. 第34回「芥川也寸志サントリー作曲賞」の選考、決定、贈賞

2023年に初演された新進作曲家の管弦楽作品の中で最も清新かつ豊かな将来性を内包する作品を選定。楽譜と音源による一次選考を経て、最終選考は「サントリーホール サマーフェスティバル 2024」の一環として、公開の場で行った。

ア. 第1次選考会

令和6年2月26日（月）に開催し、「第34回芥川也寸志サントリー作曲賞」の選考対象となる日本人作曲家の交響管弦楽曲（2023年1月から12月の間に国内外で初演）候補作品について譜面および録音による選考を行い、候補作品3曲を選出した。

イ. 「第34回芥川也寸志サントリー作曲賞」選考演奏会

8月24日（土） 15：00～、サントリーホール 大ホール

サマーフェスティバルの一環として開催。第32回受賞記念委嘱の波立裕矢氏作品を初演したのち、候補作品を演奏した。演奏終了後、3人の選考委員が公開による選考を行い第34回「芥川也寸志サントリー作曲賞」（150万円）を石川健人作曲の『ブリコラ-じゅげむ』に決定、贈賞した。

選考委員は、新実徳英、望月京、山本裕之の3氏、選考会司会は白石美雪氏。

なお、受賞作曲家には新作を委嘱（委嘱料100万円）し、完成後、当財団主催の演奏会で初演する。

公益目的事業 4（助成事業）

1. 佐治敬三賞推薦コンサート活動

佐治敬三賞応募公演の中から、一部を紹介し実際に聴いてもらう機会を提供するために、佐治敬三賞推薦コンサートとして選定、チケットプレゼントを行った。

令和6年度は、第24回佐治敬三賞応募公演のうち令和6年4～12月開催公演および第25回佐治敬三賞応募公演の一部（令和7年1～3月開催分）から推薦された29公演を、ホームページなどで告知募集し、抽選により各公演6～12名を招待した。

2. 学生向け楽器貸与

世界的文化遺産である弦楽器名器を保全し次世代に継承するとともに、若手音楽家の育成、クラシック音楽の発展に貢献することを目的に、学生向け楽器貸与を行った。

11回目となる本年度は、横浜みなとみらいホール 小ホール（横浜市）にて実施された「第78回全日本学生音楽コンクール全国大会」バイオリン部門中学校の部（11月30日）・高校の部（11月29日）（主催：毎日新聞社）において、選定委員が「第11回サントリー芸術財団名器特別賞」受賞者を選定した。財団所蔵のバイオリン1挺について受賞者への無償貸与を令和7年1月より開始した。

ア. 「第11回サントリー芸術財団名器特別賞」受賞者および貸与楽器

後藤苺瑚 ANGELO TOPPANI（1740年製）バイオリン

イ. 選定委員

梅津時比古（毎日新聞社 特別編集委員）、 田中義郎（毎日新聞社 企画・文化事業部長）

石井志都子（音楽家、全日本学生音楽コンクール諮問委員）

辰巳明子（音楽家、桐朋学園大学・桐朋学園大学院大学学長）

渡辺玲子（音楽家）、 田中徹（サントリー芸術財団専務理事）

3. 演奏家向け楽器貸与

以下の楽器について、令和6年11月～令和7年3月末の期間に新規貸与希望者の募集を行った。

令和7年5月（予定）に選考会を実施のうえ貸与を開始する。

①PIETRO GIACOMO ROGERI（1710年製作 チェロ）

②ANTONIO STRADIVARI（1727年製作 バイオリン）

③PAOLO ANTONIO TESTORE（1728年製作 ヴィオラ）

4. その他の助成

ア. 活動助成 （1）音楽文献目録委員会 （2）MUSIC FROM JAPAN

イ. 運営助成 （1）日本作曲家協議会 （2）日本現代音楽協会 （3）日本演奏連盟

以 上